

---

# 普通の普通な普通

心休 一優

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>



## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

普通の普通の普通

### 【Nコード】

N6492Q

### 【作者名】

心休 一優

### 【あらすじ】

どこにでもある街のどこにでもある普通  
誰だって普通はある、それは侮辱されたくない  
街人の人々は自分の普通を主張しあう  
普通か・異常か、街人は自分の普通を守るためなら普通の範囲内で  
何だってする



## 普通のプロローグ（前書き）

私の普通を全面的に出した作品です。  
もしよかったら感想くださいな



# 普通のプロローグ

「……あ、もしかして話したほうがいいんですか？……うーん、でもこれは相手が話されたくないんじゃない？……わかりましたよ、わかりました。話せばいいんでしょう。相手のことも考えてあげてあげなくちゃ可哀想ですよ。それじゃ話しますね」

「僕と彼は親友でしたよ。え？ いや、嘘なんていいませんよ確かに彼は誰かにすぎりつかなきゃ生きていけない様な人間でしたけどそれでも僕は仲よかったですよ？ 話し戻せ？ やだな、聞いたのはそっちからじゃ無いですかそんなせつかちだと人生損しますよ？ 僕心配だなー」

「・・・ああ、それで僕は彼の娘さんが好きになっちゃいましたね。丁度僕と同じ年ですしね。彼に僕一生懸命頼んだんですよ結婚を許してくださいって頭下げて、でも彼は今まで沢山の人にすがりついて足引つ張つて生きてきた人間ですからね、ねじ曲がつてたんですよ。僕彼が可哀想ですよ。あ、それでやつぱり1人じゃ自分の娘の将来も考えられないような人間ですから娘の将来をろくにかんがえてあげずに僕との結婚をやめさせたんですよ。ひどい親でしょ?」

「だから僕もつとしかりと娘さんの心配をできる様にしてあげるために娘さんのことを下半身麻痺にしてあげたんですよ。そしたら彼泣いちゃってねやっぱ嬉しかったんだと思うんですよね。なのに・・・なのに・・・あいつは恩を仇でかえしたんですよ。僕を警察に通報したんですよ僕は何にも悪くないのに・・・でもいいんですよどうせ未成年ですしなんにもしてないんだから僕はすぐに家に返してもらえますでしょ？出たら真っ先に彼のところに行つてしつ



かりと1人で生きていける様にしてあげるんだ。ねえ威張って他人の事を微塵も考えてあげる事のできないおまわりさん、僕って優しいでしょ。そうだ！おまわりさん、貴方の事も今度他人の事を気にかける事のできる優しい警察にしてあげますね」

少年はにっこりと警察に微笑みかけた



## 普通のプロローグ（後書き）

皆さんにも普通ってのはありますよ

異常だってあります

自分の普通って他人には異常にうつることもありますし

逆もあります

だから他人にお前は異常だと言われても気にしないでください  
胸を張ってください

君のしていることはどんなに多く他人に異常にうつっても

多くの他人を敵にまわすようなことをしても

君の普通を普通と感じてくれるひとがいますから

味方はいますから



**全員が異常ならそれは普通になる（前書き）**

できれば毎日更新それが普通と言いたい



## 全員が異常ならそれは普通になる

金盞花 黄色の朝はきっかり5：30に始まる

そして顔を洗い朝食を食べ新聞を読み6：30に家を出る

その後散歩も兼ねながら学校に一時間かけて到着する

それが金盞花の日課である

金盞花はいつも日常の中にいた

別に日常が退屈だ、とかいう訳ではないむしろ彼はこの平穏な日常が好きであつた

つてのが昨日一日で私が調べたデータなんですけどどうです？正確なデータでしょ？」

と水連 蒼花は鼻たかだかと不正確なデータを金盞花に掲げる

「なあ水連、俺のことを調べてどうなりつてんだ？それより昨日出された宿題はやってきたのか？やったのならクラス委員長の僕に提出してくれよ」

金盞花 黄色は水連のデータの感想などそっちのけで宿題の提出を要求する

無粋な反応だがこうも毎日同じやりとりが続けば誰だって普通はこうなる

「宿題ならしつかりとやってないですよ。ほら」

水連はパラリと真つ白なノートを金盞花にみせつける

「・・・水連、君はどうしてそう当たり前のことができないんだ？」

「当たり前前って、なに言ってるんです？普通宿題なんてやりませんし皆だってやりませんよ」

ふー、やれやれみたいにかたをすくめ両手をあげてる水連に金盞花はこう言った



「水連以外全員出してるよ。当たり前だね」  
それを聞いた途端水連は腰が抜けるほど驚き引っくり返りそうになった

なんとかバランスをとって倒れるのを防ぐと水連はもう一度金盞花に今の言葉に間違いがないか確認する  
もちろん聞き間違いではなかったし

「一応言っておくと他の教科も水連を除いて全員提出率90%以上を維持してるからな」  
と言われてしまった

この時水連の頭に浮かんだのは何故皆が宿題をしつかりと出しているのかと疑問などではなく自分の持っている

宿題は出さないやつが必ず1人はいる

という一普通（常識）が否定された事に対する悔しさだった  
水連は思い返す

2ヶ月まえ、進学したばかりの頃を。

思ってみればそのころから自分の持っている絶対的な一普通（常識）は

金盞花のもつ一普通（当たり前）と違っていた。

その時は金盞花の一普通（当たり前）などどうでもよかった

なぜなら自分の一普通（常識）のほうが世間の一普通（一般常識）  
からかんがえても正しかった

初めの2日間は自分の思ったとおり自分の一普通（常識）の方が正しかった

遅刻者や宿題をやってこない者、授業中寝る者だった

このような者達がいるのが水連の普通だった

なのに2日たった後から水連の普通は異常に変わった

全員が金盞花の掲げる一普通（一般常識）ど通りの行いをする様になった



遅刻者はゼロ、宿題提出率100%、授業中は一言もお喋りなどをするものがいなくなったのだ

水連の普通は金盞花の普通に負けたのだった

水連はこの状況が悔しかった

金盞花の異常を見つけたかった

だが金盞花の異常を見つけてもそれはすでに自分以外の者にとっては普通になってしまっていた

くやしい

水連は自分が普通であることを皆に誇らしげに掲げることができるようになりたかった

水連は皆の普通を、金盞花の普通を異常に変える事を決意したのだった



**全員が異常ならそれは普通になる（後書き）**

自分が1番常識人だ！

そう自負している人にとっては自分が異常者なポジションになってしまうことが何より苦痛なのです

自分は朝必ず朝食を食べる

これは一普通（当たり前）だと思っていたも  
教室の全員が朝に朝食を食べない

と言っていたら朝食を食べるひとは教室の中では異常になってしま  
うのです

世間的には普通でもね・・・



## 水連は普通で普通なのに異常なの（前書き）

前回毎日一話とか言っといてもう3日も掲載してなかった  
でもいい、いつも自分の言ってることは守れないしな  
俺の普通なのだから大切にしよう



水連は普通で普通なのに異常なの

水連 蒼花が知る喜びを知ったのは  
家に置いてあった動物図鑑を読んだ時だった彼女は当時5歳の頃だった

図鑑に載っている動物の種類を読んだ彼女は世界にいる動物の種類に驚いた  
自分と形が違う動物が沢山いて驚いた  
そして何より驚いたのは本には沢山の情報が載っている事に驚いた  
のだった

その日から晴れの日はず外に遊びに行ってた彼女は晴れの日でも家から一步も出ず、部屋からも一步も出ないで本を読み込んだ。

3日もすると家の本を全て読み尽くしてしまった  
両親がその事をとて褒めてくれたが彼女はなんで褒めるのかわからなかった  
彼女にとって本を読むのは普通になっていたからである

次に物事を知る手段として興味を持ったのがパソコンであった  
彼女はパソコンを使い様々な情報を得たが一週間で扱うのをやめた  
やめた理由は長時間使っていると目が悪くなる、嘘の情報があるなど沢山あったが

一番の理由は体験である。  
本もそうだったが情報書いてあるのはあくまで字であり  
写真に移されてるのはあくまで絵であり  
動画で流れているのはあくまで小さな光の点滅でしかなかった  
彼女は生の情報を求めた



水連は運良く、家が大会社を経営しているため様々な場所に行くことができた

現地で生の情報に触れるのは彼女に最高の幸福をもたらしたのだった  
しかし、そんな幸福はすぐに消えてなくなった

会社が経営破綻したのだ

そのショックで父親は死に、母親は父親の死んだショックでボロボロになってしまった

母親のショックはとても大きいものだったが水連のショックはそれ以上だった

生の情報にありつけなくなってしまったのだから。

生の情報に飢えていた水連が他人の情報を知らうと思うまで時間はかからなかった

知りたいのだから知るその為にはなんでもする、その考えが普通と  
思い行動していた彼女は次第に教室で、学生で、校内で、  
異常者として避けられるようになっていった。

水連は学校内で居場所を失ってしまったのだ  
自分の普通は学校内では、世間では異常なのだと言われた気がした  
それから彼女は次第に世間での普通で自分の普通を隠さねばならなくなっ  
た

それから水連はじょじょに校内で居場所を取り戻していくことが  
できた

が、同時に 知りたい、自分の普通を表に出したい、そんな気持ち  
が水連の中でいっぱいになっていった

しかし、表に出せば自分はまた周囲から省かれてしまう

彼女は苦しんだ。

目の前に生の情報があるのに世間の普通によって知ることを抑えら  
れてしまった

隠れて学校内の人間の情報を知るようになった



ハッキングなどで情報を得ているのではないそれでは生の情報ではないのだから

水連は知りたいという欲求が爆発し彼女の身体に異常事態が起きていた

知りたいと思うことでその人間の過去リアルを体験することができるようになったのだった

水連はそんな異常事態が起きたというのに動じなかった、彼女にとってはこの不思議な力は異常ふしぎではなく普通あたりまえだったのだった

そして今に至るまで彼女は自分の普通を異常とは一度も思わないまま世間の普通で過ごしていた

せっかく自分の普通を隠し世間の普通を学び世間の普通で過ごしてきたのに

彼女の持つ世間の普通はクラスメイトの金盞花 黄色の持つ世間の普通で壊されてしまったのだ

もしまた周りに避けられるようになってしまったら今までの自分の苦勞が無駄になってしまう

だから彼女は金盞花の持つ普通を異常にすると決めた

物知りの彼女は知っている自分の他にも金盞花のもつ普通を異常だと思っている奴が居ることを

自分と同じように普通あたりまえな異普通ふつうを持っているものがあることも…







水連は普通で普通なのに異常なの（後書き）

話を短くしがちなのは自分でも悪い癖だと思う

もつとわかりやすく、長く、早く、この3つを達成しろ俺！  
でも自分の欲望には逆らえんのだよな

<http://mobile.twitter.com/>

[katunoeboi](http://mobile.twitter.com/katunoeboi)

これが俺のTwitterでもID？ともいつのかな



カラオケでワイワイしなきゃ損でしょ！（前書き）

大体夜11時〜1時頃に投稿してますな、誤字脱字あったら教えて  
くださいね



カラオケでワイワイしなきゃ損でしょ！

「出所して真っ先に向かう場所がカラオケとはね」

女は少々あきれ気味に言う

「もー、出所って言わないでよね。僕は何も悪いことしてないんだから……」

笑顔で歌を選びながら少年はつぶやく

「で、歌う歌は決まったかい？速くしてくれよな」

「せっかくの記念日なんだからしっかりと決めさせてよね、あとポテト食べたんならマイクは持たせないからね！もう」

「自分で頼んでおいて食べないのが悪いんだろ？それによく歌う気になるな……」

女は足元のスニーカーに目を落とした

「なんで？カラオケボックスは歌う為にあるんだよ？」

少年はジュースをボタボタと垂らしながら飲み干す

もちろん、ソファーも服も濡れてしまう

「……それもそうだな貸せよ、どうせまだきまんないんだろ？」

女は歌も決まったのにリモコンを話さない少年からリモコンを奪う

「……ハア、僕聞きたく無いんだけどな……へビメタ」

「どうせそんな理由で私にリモコン渡さないんだろうと思ったよ」

「僕と桜花とじゃ全く趣味が合わないだもんない」

しぶしぶ少年は曲の番号が載っている本を渡す

「じゃあ私を呼ぶなよな」

「一人カラオケはつまらないからね、それに僕の歌も聞いてもらえ  
るしね」

「ケースをはこんでくれるから、を忘れてんぞ。それに私の歌う曲  
よりあんたの歌う曲の方が皆嫌がるよ」

桜花と呼ばれた女は心底嫌な顔をしながら耳をふさぐジェスチャー



をした

そんなに嫌な歌かな？上を向いて歩こうって？少年は首を傾げた  
「それじゃあ歌うか」

桜花がマイクを手に持った時、

「あ、すいません。大至急オススメの飲み物ください、お願いしますね」

と少年が注文をした

桜花の歌の途中に入ってくるように狙っているように見える

「？ハ\*++？<\*%+>？>+%%？>！！」

桜花は途中店員が入ってくることを気にせず全力で歌う

もちろんしっかりと歌の途中に店員がきてジュースの入ったグラスを置いて行く

机の上はグラスが4個にふえた

「さてとじゃあ帰ろつか、もう時間も終わりみたいだし」

少年は結局一度も歌を歌わないまま終了時間が来てしまった

「会計は私の財布から出しとくよ。今ふえたばかりの奴、たしか頼んだのはあんたがジュース2本とポテト一つ」

女は少年を指差しながら言う

「それで私は何も頼んでなくて、あとは」

女はスーツケースを指差しながらこういった

「この財布の元”持ち主”2人がそれぞれジュース一本ずつだよな」

その後2人はスーツケースを持ってスーツケースの中の持ち物の財布を使い会計はを済ますと

当たり前のように店から出て行った



カラオケでワイワイしなきゃ損でしょ！（後書き）

なんかデュラララ？だっけかな？BOOKOFFで立ち読みした時これとおんなじようなことしてた気がするけど、まあ気にしない気にしない。

もしよかったら感想くださいな

てかカラオケいったことないな、そういえば

登場した少年ってのはプロローグに登場した少年です

あとは・・・書くことないな



お茶には何も盛らないで、前編（前書き）

かなり日にちが空いてしまいました。  
今回は短いです



## お茶には何も盛らないで、前編

その日水蓮はとあるマンションに向かっていた

水蓮の自宅は一軒家のため今向かっているマンションは入ったことも無い他人の家である

普通なら顔を見たことも無い人の自宅に入るのは拒否するところなのだがネットで知り合ったとはいえ初めて自分以外に金盞花ふつうを邪魔に思っておりなおかつ異普通な超能力あたりまえを持っている人がいると確信するチャンスなのかもしれないのだから断るわけにはいかない

そんなわけで本当は嫌なのだが仕方なくマンションに向かっていた  
とはいえ待ち合わせ場所がマンションなだけでももしかしたらそこから近くのカフェにでも行く確率だってあるのだから心配しなくても良いかもしれない

などと考えながら歩くうちに目的地であるマンションに着く

マンションの出入り口には待ち人らしき人物がすでに立っていた

待ち人は水蓮に気がつくと思いついてきた

「貴女が水蓮様でよろしいですか？」

待ち人は水蓮を本人かどうか確認すると

水蓮をマンション内に案内した

オートロックを解除し、エレベーターに乗る

待ち人の態度はホテルの案内役のように丁寧なものだった

その態度はネットでの態度では考えられないほど違っていた。

きっとネットではテンションが変わる人種だろうなと水蓮は思った



「水蓮様、お入り下さい」

待ち人は玄関のドアを開け水蓮が入るのを待っている  
玄関にはスリッパが1つ置いてあった  
中に入ると奥の部屋に通されソファーに座らされた

「それでは私はこれで」

待ち人はそう言い残し部屋から出て行ってしまった  
どうやら彼は今までネットで話していた人物ではないようだ  
おそらくネットでの相手はこれから部屋に来るのだろう

・・・

「それにしても・・・何もない部屋ですね」

水蓮は部屋を見渡す

自分が座っているソファーと向かいにもう一つソファー、そしてソ  
ファーの間に机

これらは客間などにあるセットみたいなものである  
部屋にはそれ以外何もなく生活をしている感じが全くしなかった

「こんにちはブルーフラワーちゃんで良いんだよね？」

「あ、どうも 本名は蒼花つていいいます」

「そうなんだ、それよりお見上げは？普通初対面の相手にはお見上  
げ、でしょ？」

「え？お見上げ、ですか・・・残念ですけど私はお見上げを持ち歩  
くような習慣はないんですよ」

「ないの？うそっ？信じられなーい？！普通は持つてくるでしょ、  
お見上げ。まあ礼儀ができてない事は可

哀相だね。で、なんで僕は君とこうしてあうんだっけ？」



少年、上麻原は首は若干首をかしげた、すると頭の上の学帽が少しずれる

水蓮としては初対面でお見上げを要求し、持っていなければ文句を言う方が信じられなかった

「・・・ああ、そうだった。金盞花　黄色君の話しただね」

「ええ、金盞花の話もしにきましたが今回私が知りたいのは上麻原さんのもっている異普通あたりまえを私に教えて欲しいんですよ」

「異普通あたりまえねえ、ネットで教えてあげなかったもんね。でもそんなに急がないでまずはお茶でもしようよ。お互いの普通じょうじょうでもはなしがらね、おい仏同ちゃんお茶持ってきてー、あ！薬はいらないよ。今のところ大切なお客さんだからね」

その台詞に水蓮は驚いた。

そして後悔した。相手は思った以上に異常である事に水蓮は気がつき始めてしまっていたのだった



お茶には何も盛らないで、前編（後書き）

はつきりいます

今回は日にちが空いてしまったにもかかわらず  
手抜き回です

もう疲れる

でもおかげでキャラクターデザインをよく練れました  
って事でもしかしたら挿し絵入れるかもですね

しかし、今回は全然普通の会話になってしまいました  
上麻原をもっと悪役にしたかったですよ

毒を盛るなんて普通過ぎて笑っちゃうものより  
もっと凄い事をさせてあげたい

ちなみに上麻原はある犯罪者の名前を参考にしてます



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6492q/>

---

普通の普通な普通

2011年10月8日10時57分発行